

# Lexile Measure を用いた中高英語教科書の難易度比較

大 田 悦 子

## 1. 学習指導要領と新しい科目編成

現行の高等学校学習指導要領(2009)では英語の科目構成の変更が行われ、「コミュニケーション英語」が新たに設定された。中学で扱う語数が旧学習指導要領から 300 語増加し 1200 語程度になったことで、「コミュニケーション英語Ⅰ」(以下「コミュ英Ⅰ」)で扱うことのできる語彙数も旧学習指導要領時の「英語Ⅰ」より増えた。また、指導すべき文法事項も原則唯一の必修科目であるこの「コミュ英Ⅰ」で全て扱われることとなった。ここから、「コミュ英Ⅰ」の教科書本文の難易度が「英語Ⅰ」の教科書本文の難易度よりも高まったのではないかと推測し、旧学習指導要領の「英語Ⅰ」と現学習指導要領の「コミュ英Ⅰ」の(同タイトルの)検定教科書の英文の難易度(= Readability)を比較することにした。

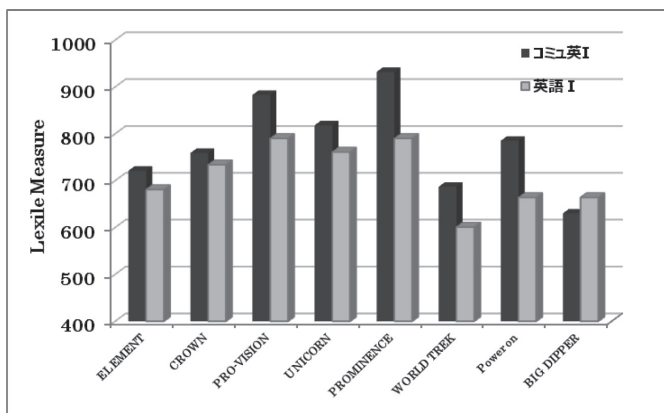
## 2. 先行研究

その結果(大田, 2015)を概観する前に、まず、分析に使用した尺度を紹介する。文章の難易度を見る際、比較的認知度が高い指標の一つに Flesch Reading Ease と Flesch-Kincaid Grade Level がある。前者は 100 を最高値とし、数値が高いほど読みやすい文章であることを示す値であり、後者はその英文の難易度がアメリカのどの学年の児童・生徒の読解レベルに相当するかを示す値である。これらは PC の Word 機能の一つとして提供されているため、誰でも手軽に利用できる。大田(2015)と本研究は、ともに教科書分析に特化した研究ではあるが、今後、教科書の難易度とそれらの教科書を使用する高校生の英語力との関係性を検証する予定であるため、上記の指標と並行して、新たな指標を採用することにした。

その指標が Lexile Measure である。単位は L であり、600L や 100L のように表す。米 MetaMetrics 社が開発したこの指標の大きな特徴は、テキストの難易度と個人のリーディング力を「同一尺度」で示すことができるという点にある。「1 文あたりの平均単語数」(テキストの統語的複雑さを判断するもの)と「単語の出現頻度」(テキストの意味的複雑さを判断するもの)という 2 つの観

点でテキストの難易度が算出されている。読み手とテキストの Lexile Measure が近いとリーディングの練習がより効果的になり、離れすぎるとリーディングへの負担が大きくなると言われている。この Lexile Measure は元々英語母語話者を対象に作られたものであり、アメリカでは広く普及しているが、日本の教育現場ではまださほど認知度は高くない。英語母語話者を対象とするこの指標が、英語学習者への指標としても有効かどうかは今後検証の余地があるものの、学習教材の難易度と学習者の英語力を同一の尺度で測ることのできるこの指標は、本研究の趣旨に沿うものである。よって、先に挙げた Flesch Reading Ease や Flesch-Kincaid Grade Level を参考値として扱いつつ、この Lexile Measure を主な分析ツールとして採用することにした。

分析の結果、対象とした8組の教科書のうち7組で、「コミュ英 I」の方が「英語 I」よりも高い Lexile Measure を示した（図1）。つまり、学習指導要領の改訂に伴い新設された「コミュ英 I」の方が旧課程の「英語 I」よりもやや難しめの英文を扱っているという傾向が見えたのである。「コミュニケーション英語」系統科目は、Reading, Writing, Speaking, Listening の4技能を総合的に扱い、読む側面に偏ることなく他の3技能とバランスをとることが強調されている。しかしながら、そこでの英文は内容理解にさらに時間を要すると予想されるものであり、指導要領の目標に沿ったレベル設定が行われているとは言い難い結果となった。



(図1) Lexile Measure で比較する「コミュ英 I」と「英語 I」の難易度（大田，2015）

さて、この傾向は旧課程の「英語Ⅱ」と新課程の「コミュ英Ⅱ」にも当てはまるだろうか？また、「コミュ英Ⅱ」は「コミュ英Ⅰ」と比べてどの程度難易度が高まっているだろうか？これらの点について、引き続き検証することにした。

### 3. 中学から高校への橋渡し

高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編（2010）では、外国語科の目標として「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」（p. 8）と明記されている。これは、高校の授業は内容理解の確認で完結されることなく、理解した内容を適切に「伝えたりする」場面が生徒に提供されなければならないということを意味している。

生徒が自分の思いや意見を英語で表現するための時間を授業で十分に確保できるかどうかは、教科書の難易度に大きく依存する。高校1年生が授業で使用する教科書は、果たしてどのあたりの難易度に設定されるべきだろうか？

これについては、生徒が中学の授業で慣れてきた授業形態や、3年間使用してきた教科書の難易度を考慮に入れる必要があるだろう。中学検定教科書は、Book 1 → 2 → 3 と学年が上がるにつれ、モノログ形式の文章が少しずつ増えてはいくが、全体的にはダイアログが占める割合が大きい。また、モノログ形式の文章であっても、1課で扱われる英文の総語数は、Book 3の後半で300～350語程度である（Reading用の英文を除いた場合）。授業形態を考えると、中学では言語材料を用いて練習する時間が比較的多いが、高校になると内容理解により多くの時間が割かれ、教師の解説の時間も長くなりがちである。また、通常、中学よりも1回の授業で扱われる分量は増し、新出語句の数も格段に増える。それらが原因となり、授業の進度についていけなかったり、英語学習に苦手意識を感じたりする生徒も少なくない。そのような状況を鑑みると、高校で最初に使用する教科書の難易度をどこに設定するかは、大変重要な問題であると言える。

根岸（2015）は、中学校検定教科書6種類のうちのひとつNEW CROWN ENGLISH SERIES 1, 2, 3（三省堂）の教科書の難易度について、Book 1（中1用）が210L、Book 2（中2用）が380L、Book 3（中3用）が480Lと報告している。また、2012年度大学入試センターのLexile Measureを1030Lと報告している。高校での最終ゴールを、Lexile Measureで言うところの1000Lあたりに設定す

るにしても、高校の入口で使用する教科書の難易度を、ゴール（≒大学入試）のみを念頭に設定するのは得策とは言えない。中学から高校へ無理のない橋渡しをするためには、教科書の難易度に大きな差を作らないようにしなければならないだろう。

以上の理由により、本研究では、大田（2015）からの継続調査としての「英語Ⅱ」と「コミュ英Ⅱ」の難易度比較に加え、中学検定教科書と高校検定教科書の難易度比較も実施することにした。

#### 4. 研究の目的

本研究の目的は、大田（2015）の追調査として、旧課程と新課程の高校教科書の英文の難易度を比較することと、中学検定教科書とコミュニケーション英語Ⅰの英文の難易度を比較することである。

##### 4.1 研究課題

以下の2点が今回の Research Questions となる。

- (1) 「コミュ英Ⅱ」の教科書本文と「英語Ⅱ」の教科書本文も、Ⅰ系統同様に英文難易度に違いが見られるか？見られる場合、どの程度の開きになるか？
- (2) 「コミュ英Ⅰ」の教科書本文と中学検定教科書では、英文難易度にどの程度の開きが見られるか？

#### 4.2 方法

##### 4.2.1 分析用高校検定教科書

Research Question (1) で分析対象とした高校検定教科書は、大田（2015）で使用したものと同一タイトルの「英語Ⅱ」「コミュ英Ⅱ」の各8種類（計16冊）である。大学進学希望者を抱える平均的な高校が採用していると想定される教科書のうち、指導要領改訂前後で教科書タイトルに変更のない任意の8組を対象とした（表1）。

##### 4.2.2 分析用中学検定教科書

Research Question (2) の分析に際し、中学検定教科書については現在発刊されている6種類全てを対象とすることにした（表2）。比較する「コミュ英Ⅰ」の Lexile Measure については、大田（2015）のデータを再利用することとした。

(表1) 分析対象の高校検定教科書一覧

	旧学習指導要領《英語Ⅰ》	新学習指導要領《コミュ英Ⅰ》	出版社
1	ELEMENT English course II	ELEMENT English Communication II	啓林館
2	Crown English Series II (New Edition)	Crown English Communication II	三省堂
3	PRO-VISION ENGLISH COURSE II (New Edition)	PRO-VISION English Communication II	ピアソン桐原
4	UNICORN ENGLISH COURSE II	UNICORN English Communication 2	文英堂
5	PROMINENCE English II	PROMINENCE Communication English II	東京書籍
6	WORLD TREK ENGLISH COURSE II	WORLD TREK English Communication II	桐原書店/ ピアソン桐原
7	Power On English II	Power On Communication English II	東京書籍
8	BIG DIPPER English Course II	Big Dipper English Communication II	数研出版

(表2) 分析対象の中学検定教科書一覧

	教科書	出版社
1	COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1, 2, 3	光村図書出版
2	NEW CROWN ENGLISH SERIES 1, 2, 3.	三省堂
3	NEW HORIZON English Course 1, 2, 3	東京書籍
4	ONE WORLD English Course 1, 2, 3	教育出版
5	SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3.	開隆堂出版
6	TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1, 2, 3	学校図書

#### 4.3 分析手順

本調査では、大田（2015）同様、まず上記に挙げた高校検定教科書「英語Ⅱ」と「コミュ英Ⅱ」の8組、および中学検定教科書6社分×3学年分の計34冊

の全てのレッスンの本文をテキストファイル化した。そして、それらを Lexile Analyzer という分析ツールにかけ、Lexile Measure を算出した。大田 (2015) で使用した無料版<sup>1</sup>は一度に1000語までしか分析にかけられないタイプのツールであったため、レッスン毎に Lexile Measure を出し、それらの平均値を各教科書の Lexile Measure とした。今回は、一度に1000語以上を扱うことができるバージョンを使用し、教科書の全レッスンの本文を一つのまとまったテキストとして扱い、教科書毎に Lexile Measure を算出することにした。

さらに、大田 (2015) と同様、教科書本文をワードファイル化し、それぞれの教科書の難易度を Flesch Reading Ease と Flesch-Kincaid Grade Level でも提示することによって、Lexile Measure の妥当性も確認していくことにした。

## 5. 調査の結果

### 5.1 「コミュ英Ⅱ」と「英語Ⅱ」の難易度の差

#### 5.1.1 Lexile Measure で比較した場合

今回対象の8組の Lexile Measure を比較したところ、「コミュ英Ⅰ」と「英語Ⅰ」の差ほどの開きは確認されなかった(表3)。915L(コミュ英Ⅱ)と904L(英Ⅱ)の平均値のみを比較すれば11Lの差があるものの、これは誤差の範囲とも判断できる。よって、今回分析対象とした8種類の教科書に限定した傾向ではあるが、指導要領改訂前の「英語Ⅱ」と改定後の「コミュ英Ⅱ」の難易度はほぼ同等と言っていいだろう。しかしながら“コミュニケーション活動”に適した難易度かどうかという観点で考えた場合、両方とも900Lを超えていることから適切なレベルとは言い難い。

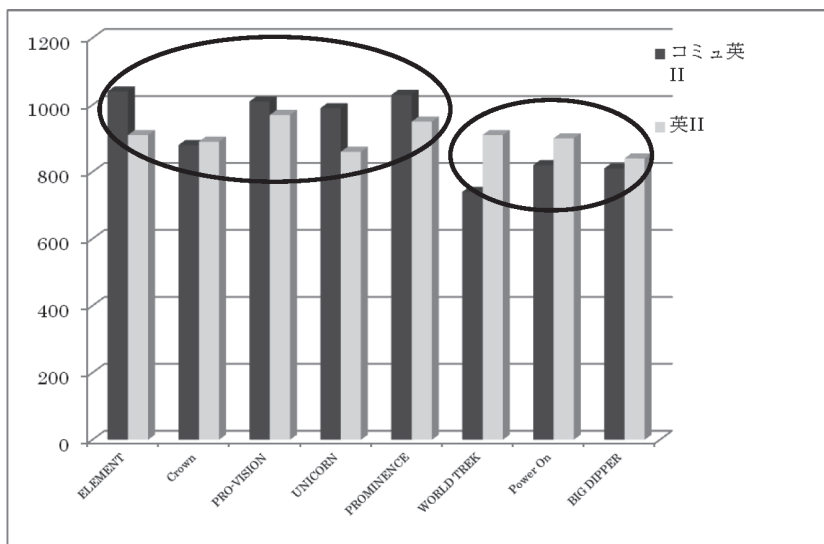
---

<sup>1</sup> <https://lexile.com/analyzer/>

(表3) Lexile Measure で比較する「コミュ英Ⅱ」と「英語Ⅱ」の難易度

教科書タイトル	コミュ英Ⅱ	英Ⅱ	コミュ英Ⅱ－英Ⅱ(差)
ELEMENT	1040	910	130
CROWN	880	890	-10
PRO-VISION	1010	970	40
UNICORN	990	860	130
PROMINENCE	1030	950	80
WORLD TREK	740	910	-170
Power On	820	900	-80
BIG DIPPER	810	840	-30
<b>Mean</b>	<b>915</b>	<b>904</b>	<b>11</b>

今回分析対象とした8種類のうち、(表3)の上から5冊 *ELEMENT*、*CROWN*、*PRO-VISION*、*UNICORN*、*PROMINENCE* は、内容が比較的難しめで1レッスンの分量も多いタイプの教科書である。興味深いことに、この5冊のうち4冊に共通点が見られた。やはり誤差の範囲とも取れるが、(図2)に示す通り、「コミュ英Ⅱ」の Lexile Measure が「英語Ⅱ」の Lexile Measure をわずかに上回っているという点である。一方で、残り3冊(先ほどの5冊と比べると難易度および1レッスンの長さがやや控えめに設定されていると判断される教科書)については、逆の現象、つまり「コミュ英Ⅱ」の Lexile Measure が「英語Ⅱ」の Lexile Measure よりもやや下回るという現象が見られた。今回の8種類の教科書に限定した結果ではあるが、旧課程の「英語Ⅱ」以上に新課程の「コミュ英Ⅱ」では教科書間のレベル格差が広まった可能性がある。



(図2) Lexile Measure で比較する「コミュ英II」と「英語II」の難易度

### 5.1.2 Flesch Reading Ease および Flesch-Kincaid Grade Level で比較した場合

分析にかけた結果、「コミュ英II」8冊のFlesch Reading Easeの平均値が65.41、「英語II」8冊の平均値が68.34であった。2. 先行研究で述べた通り、Flesch Reading Easeは数値が低いほどテキストの難易度が高いことを意味するので、単純比較では「コミュ英II」の難易度が「英語II」の難易度をわずかに上回ったことになる。Flesch-Kincaid Grade Levelでも「コミュ英II」の学年レベルの方がわずかに上であった。ただし、0.5(学年)の差はそれほど大きな差とは考えにくい。

教科書別に細かくみた場合、全ての数値の大小が先のLexile Measureと合致するわけではないものの、Lexile Measureで見た全体的傾向とFlesch Reading EaseやFlesch-Kincaid Grade Levelで見た全体的傾向は概ね類似している。つまり、この2つの指標を用いた場合でも「コミュ英I」と「英語I」で見られたほどの顕著な差は「コミュ英II」と「英語II」の間には見られなかった。



(表4) Flesch Reading Ease および Flesch-Kincaid Grade Level で見る「コミュ英 II」と「英語 II」の難易度

	Flesch Reading Ease				Flesch-Kincaid Grade Level			
	コミュII	難>易	英語II	差(コミュ英II-英I)	コミュII	難>易	英語II	差(コミュ英II-英I)
ELEMENT	63.70	>	64.40	-0.70	8.20	>	7.60	0.60
CROWN	66.10	>	71.80	-5.70	7.40	>	6.50	0.90
PROVISION	65.60	>	71.20	-5.60	7.90	>	6.90	1.00
UNICORN	64.80	>	72.30	-7.50	7.90	>	6.30	1.60
PROMINENCE	60.20	>	68.90	-8.70	8.90	>	7.20	1.70
WORLD TREK	69.00	<	68.50	0.50	6.30	<	6.90	-0.60
Power on	66.10	<	60.00	6.10	7.00	<	8.20	-1.20
BIG DIPPER	67.80	>	69.60	-1.80	6.60	>	6.50	0.10
<b>Mean</b>	<b>65.41</b>	<b>&gt;</b>	<b>68.34</b>	<b>-2.93</b>	<b>7.53</b>	<b>&gt;</b>	<b>7.01</b>	<b>0.51</b>

## 5.2 「コミュ英 I」から「コミュ英 II」への難易度の推移

次に、「コミュ英 I」から「コミュ英 II」へどの程度難易度が上がったのかを、Lexile Measure と Flesch-Kincaid Grade Level の2つで確かめることにした。

### 5.2.1 Lexile Measure で見る推移

Lexile Measure では、「コミュ英 I」と「コミュ英 II」の間に 138L の差があった(表5)。ただし教科書によってその差が 50L 未満であったり 300L を超えたりと、「コミュ英 I」と「コミュ英 II」の差には教科書間で大きな違いがあり、8冊に共通した傾向が見られたわけではない。強いてあげれば、比較的難易度が高めの教科書(表5の上5冊)と難易度が中程度の教科書(表5の下3冊)の中でそれぞれ共通点らしきものがある。それは前者のタイプの教科書の方が後者のタイプの教科書より I・IIの差が大きい傾向にあるというものである。

根岸(2015)で報告された2012年度大学入試センター試験の Lexile Measure (1030L)を考慮すると、現在使用されている「コミュ英 II」が 800L～1000L の難易度であるという事実は、それを Reading 用教材として使う分には妥当な設定かもしれない。しかし、「コミュニケーション英語」は Reading だけでなく他の3技能も取り入れた統合的な授業内容でなければならない。その点を踏まえると、旧課程の「英語 II」にしろ、新課程の「コミュ英 II」にしろ、900

Lという難易点が、本当に Speaking や Writing のような表現活動にまで進めていくのに適切な難易度かどうかを考える必要があるだろう。

(表5) Lexile Measure で見るコミュ英 I～IIへの推移

教科書タイトル	コミュ英 II	コミュ英 I	コミュ英 II と I の差
ELEMENT	1040	721	319
CROWN	880	759	121
PROVISION	1010	883	127
UNICORN	990	818	172
PROMINENCE	1030	932	98
WORLD TREK	740	687	53
Power on	820	785	35
BIG DIPPER	810	630	180
<b>Mean</b>	<b>915.00</b>	<b>776.88</b>	<b>138.13</b>
<b>Median<sup>2</sup></b>	<b>935.00</b>	<b>772.00</b>	<b>124.00</b>

### 5.2.2 Flesch-Kincaid Grade Level で見る推移

Flesch-Kincaid Grade Level で「コミュ英 I」と「コミュ英 II」の差を見ると、平均して 1.24 の学年差があった（表6）。しかし、ここでもまた教科書間で傾向が異なり、教科書によっては I から II へ 2 学年分以上難易度が高くなってしまいうものもあった。高校で教科書を採択する場合、同じ教科書会社の I と II を連続して採用するケースが多いが、教科書によって I から II への上昇の幅が必ずしも一律ではないことを、教科書選定に際し留意しておく必要があるようである。加えて、仮に 1 学年分の上昇であっても、英語母語話者にとっての 1 学年差が、英語を外国語として学習する日本の高校生にはそれ以上の差になりうることもまた、指導者はきちんと認識しておくべきであろう。

<sup>2</sup> 各教科書の Lexile Measure に大きな偏りが見られたため、I と II の平均を見るのに中央値も参考値として用いることにした。

(表 6) Flesch-Kincaid Grade Level で見るコミュ英 I ～コミュ英 II への推移

教科書タイトル	コミュ英 II	コミュ英 I	コミュ英 II と I の差
ELEMENT	8.20	5.40	2.80
Crown	7.40	6.06	1.34
PRO-VISION	7.90	7.15	0.75
UNICORN	7.90	6.69	1.21
PROMINENCE	8.90	7.42	1.48
WORLD TREK	6.30	5.69	0.61
Power On	7.00	6.63	0.37
BIG DIPPER	6.60	5.22	1.38
<b>Mean</b>	<b>7.53</b>	<b>6.28</b>	<b>1.24</b>
<b>Median</b>	<b>7.65</b>	<b>6.35</b>	<b>1.28</b>

### 5.3 中学検定教科書から高校検定教科書への難易度の推移

#### 5.3.1 中学検定教科書 1～3 の推移

根岸（2015）で、中学検定教科書 *NEW CROWN ENGLISH SERIES 1, 2, 3* の難易度と高校英語教科書<sup>3</sup>の難易度が報告されているが、本調査では、中学検定教科書 6 種類全てを分析対象とし、根岸(2015)の結果を再確認することにした。以下が中学検定教科書 6 社の Lexile Measure の一覧である。根岸（2015）が報告した Lexile Measure と以下に示す本調査での *NEW CROWN* の Lexile Measure は一致しないが、これは分析対象に Reading 用の英文を含めたか否かの違いから発生した差であると推察される<sup>4</sup>。

平均値と中央値の両方から判断すると、中学 1 年用の教科書は 100L 位の難易度であるといえる（表 8）。中学 2 年用の教科書については、Columbus の Lexile Measure が他よりかなり低く出ているものの、それ以外の 5 冊は

<sup>3</sup> 三省堂発刊の *CROWN English Communication I, MY WAY English Communication I, VISTA English Communication I* の 3 冊

<sup>4</sup> 本研究では Lesson / Unit / PROGRAM というタイトルのついた課の本文のみを分析の対象とし、学校により扱いに差があると思われる Reading 用英文は分析対象外とした。なお、SUNSHINE English Course については、PROGRAM の中で Reading（用テキスト）の扱いとなっている課は、同様の理由により分析対象外とした。

300~450 の間に分布している。中学 3 年用は、やはり Columbus のみ 400L に届いていないが、それ以外の 5 冊は 450~550 の間に分布している。よって、中学検定教科書の本文は、Lexile Measure で示すと、大凡 100 → 350 → 500 周辺を推移していると結論づけられる（図 3）。

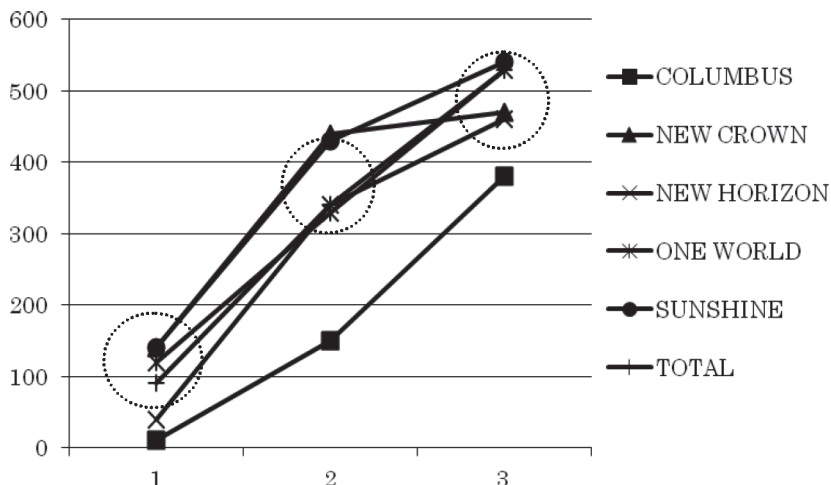
(表 7) 中学検定教科書 6 社の Lexile Measure

	Lexile Measure	1 文の長さ	総語数
COLUMBUS 1	10	4.23	1045
COLUMBUS 2	150	5.42	1626
COLUMBUS 3	380	6.88	2058
NEW CROWN 1	140	4.99	968
NEW CROWN 2	440	7.25	1710
NEW CROWN 3	470	8.16	2300
NEW HORIZON 1	40	4.43	1255
NEW HORIZON 2	340	6.6	1531
NEW HORIZON 3	460	7.68	1414
ONE WORLD 1	120	5.07	1323
ONE WORLD 2	330	6.51	1972
ONE WORLD 3	530	7.98	1980
SUNSHINE 1	140	5.06	1240
SUNSHINE 2	430	7.68	1873
SUNSHINE 3	540	8.72	1569
TOTAL ENGLISH 1	90	4.63	898
TOTAL ENGLISH 2	340	6.33	1569
TOTAL ENGLISH 3	530	8.25	1840

(表 8) 中学検定教科書 Book 1 ~ 3 の Lexile Measure の推移

Lexile Measure	Book 1	Book 2	Book 3
COLUMBUS	10	150	380
NEW CROWN	140	440	470
NEW HORIZON	40	340	460
ONE WORLD	120	330	530
SUNSHINE	140	430	540
TOTAL ENGLISH	90	340	530
<b>Mean</b>	<b>90</b>	<b>338</b>	<b>485</b>
<b>Median<sup>5</sup></b>	<b>105</b>	<b>340</b>	<b>500</b>

<sup>5</sup> 今回も教科書により Lexile Measure の数値に大きな偏りが見られたため、学年間の比較に中央値も参考値として用いることにした。

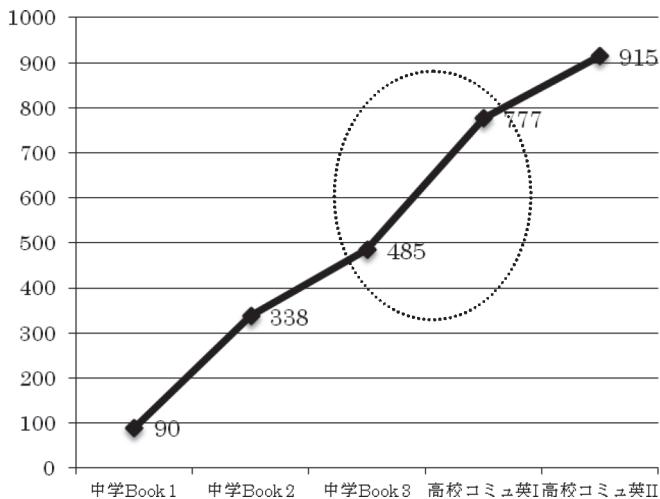


(図3) 中学検定教科書6冊の難易度一覧

### 5.3.2 中学～高校1年への推移

ここで、中学1年から高校2年までの5年間の教科書の難易度の推移を Lexile Measure を用いて確認する。先ほどの中学3年間の推移に加え、ここに「コミュ英Ⅰ」「コミュ英Ⅱ」を足して全体を俯瞰すると、中学 Book 1 (90) から中学 Book 2 (338) へは+248、中学 Book 2 (338) から中学 Book 3 (485) へは+147、中学 Book 3 (485) から「コミュ英Ⅰ」(777) へは+292、「コミュ英Ⅰ」(777) から「コミュ英Ⅱ」(915) へは+138 という上昇を見せている(図4)。この中で、中1→中2(+248)と中3→高1(+292)にかけての変化がその他の学年の変化と比べて著しい。

これを中央値と比較しても、中学 Book 1 (105) から中学 Book 2 (340) へは+235、中学 Book 2 (340) から中学 Book 3 (500) へは+160、中学 Book 3 (500) から「コミュ英Ⅰ」(772) へは+272、「コミュ英Ⅰ」(772) から「コミュ英Ⅱ」(935) へは+163 となり、やはり中1→中2(+235)と中3→高1(+272)にかけての変化がそれ以外の学年間と比べて目立っている(表5, 8)。中1→中2と中3→高1の変化を比べた場合は、中3→高1での難易度の変化の方がより顕著である。



(図4) 中学～高校教科書の Lexile measure の推移

現在、小学校5・6年で週1の外国語活動（実質は「英語」活動）が始まっているとはいえ、あくまでも教科外活動であるので、教科化という観点で見れば、中学1年が英語学習の初年度である。よって、生徒の学習に大きな負担がかからないように、教科書の語彙や文法のレベルはある程度統制されていると予想される。結果的にBook 2との差がやや開いてしまうのもやむを得ないと言える。しかしながら、中3と高1の教科書難易度の格差については、後で触れる「高1ギャップ」という現象を考慮すると、もっと深刻に受け止められるべきだろう。教科書を作成する側も、教科書を採用する側も、さほどこの問題には意識が及んでいないように思われる。学習段階が進むにつれ、教科書難易度の上昇が学習に及ぼす影響もその分大きくなるはずである。果たして、中学教科書Book 3と「コミュ英I」の難易度の格差の原因は何であろうか。一つに、英文を構成する文の長さ（＝1文あたりの平均語数）が考えられる。

#### 5.4 中高の検定教科書の一文の長さの比較

今回分析に使用したLexile MeasureとFlesh Reading Ease / Flesh Kincaid-Grade Levelが共通してその数値の算出に用いているのが「一文あたりの平均語数」である。英文の難易度を上げる要因としては、他に、語いレベルや文構造の複雑さ（例：単文なのか複文か、修飾句（節）や挿入句がどれだけ追加されているか）も挙げられるが、今回は「1文あたりの平均語数」に注目し、5

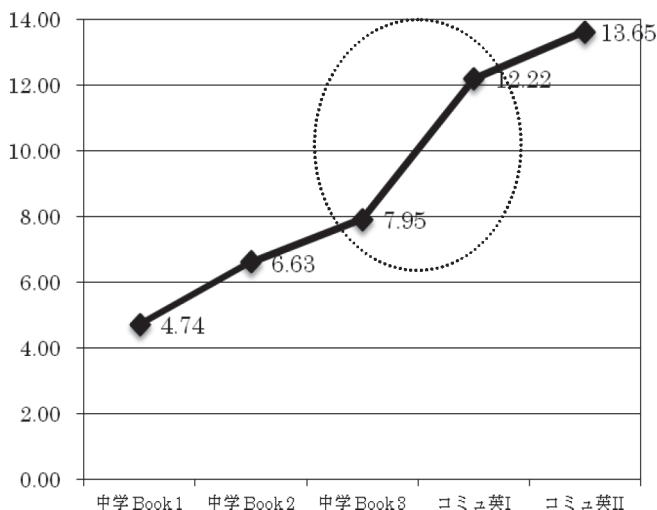
カ年分の教科書の一文の長さの推移を見ていくことにした。

予想通り、中学教科書 Book 3 と「コミュ英 I」の間で大きな差が確認された（表 9、図 5）。Book 1 で約 5 語、Book 2 で約 7 語、Book 3 で約 8 語というように、中学 3 カ年では、生徒に過度な負担をかけるほどの変化が起きているようには思えない。しかしながら、高校入学後に使用される一般的な「コミュ英 I」の教科書になると、その平均語数が約 12 語となり、Book 3 からは平均 4 語増えている。

このように、中学教科書 Book 3 と高校教科書「コミュ英 I」の差は、Lexile Measure の増加だけでなく、一文あたりの平均語数の増加という点でも確認された。一文あたりの語数が増えるということは、その分読みに負担がかかることを意味する。形容詞や副詞が付加されることで一文の語数が増えるという場合もあるが、後置修飾句（節）などが足されることにより、語数のみならず文の複雑さも増すのであれば、学習者にとっては一大事であろう。

（表 9）中高検定教科書の 1 文の長さ（平均）の推移

	中学 Book 1	中学 Book 2	中学 Book 3	コミュ 英 I	コミュ 英 II
1 文の長さの平均	4.74	6.63	7.95	12.22	13.65



（図 5）中学～高校教科書の一文の長さの推移

## 6. 考察

本調査によって、中3と高1の教科書の難易度にかかなりの差が存在することが明らかになった。ベネッセ教育総合研究所（2014）が実施した中高生の英語学習の実態と意識に関する調査<sup>6</sup>の中に、本研究ともつながる興味深い報告がある。「3. 英語学習に対する意識」という項目の中で、「英語が苦手になった時期」と「英語学習のつまずき（の具体的な事例）」に関する回答の結果が紹介されている。

それによると、「英語が苦手になった時期」として高校1、2、3年生の多くが選択した時期が「中1前半～中2後半」と「高1前半」の2つであった。また、英語学習のつまずき具合に関する質問については、計12項目用意されたうちの以下の4項目（表10）において、中学3年と高校1年のそれぞれの「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」を合算した割合に10%以上の開きが生じた。これらは、中学生以上に高校1年生が、以下のような場面で英語学習に苦労しているという実態、つまり「高1ギャップ」の実態を如実に示したものとと言える。

（表10）英語学習上のつまずき（カッコ内の数字は%）

項目	中3生	高1生	割合の差 (高1－中3)
文法が難しい	67.7	79.9	12.2
英語を聞きとるのが難しい	58.6	70.9	12.3
単語を覚えるのが難しい	57.0	68.5	11.5
テストのための勉強が大変	35.7	51.4	15.7

（ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査2014速報版」p.11を編集）

このデータからも明らかなように、中学終了時から高校1年終了時までの間で、確実に学習のつまずきが起こっている。その原因の一つが、本研究で注目した「教科書の難易度」にあると考えられる。教科書の難易度が生徒の理解度をはるかに超えるレベルである場合、上記に挙げたようなつまずきが発生してしまうのである。

英文の理解に負荷がかかる要因として、すでに挙げた「一文の長さ」「文構

<sup>6</sup> [http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_ALL.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf)



造の複雑化（後置修飾句（節）の追加に伴う複雑化）」以外に、「1回の授業で扱われる新出語彙の数」や「1レッスンの長さ」も挙げられる。実は、中学校3年の1レッスンの総語数と高校1年の1レッスンの総語数にはかなりの差がある（表11, 12）。中学教科書の1レッスンの文章は、Book3の最終レッスン（またはその周辺）であっても、長くて300語程度である。それが「コミュ英I」の（難易度高めの）教科書になると、600語程度にまで増えてしまう。もちろん、これがそのまま1回の授業で与えられる分量を意味するわけではないが、1カ月、1学期単位で考えると生徒の負担もそれだけ増していくことになる。上記のアンケートの中の「テストのための勉強が大変」という項目も、レッスン毎に扱う英文の語数が高校で各段に増えることがもたらす結果だと解釈できる。

（表11）中学検定教科書 Book 3 の1課あたりの総語数

教科書名	COLUMBUS	NEW CROWN	NEW HORIZON	ONE WORLD	SUNSHINE	TOTAL ENGLISH
1課あたりの総語数（平均）	294	288	236	283	224	263
最終課またはそれに近い課の本文語数 <sup>7</sup>	(Unit 6) 358	(Lesson 7) 369	(Unit 6) 264	(Lesson 6) 297	(Program 7) 263	(Lesson 7) 282

（表12）コミュ英Iの1課あたりの総語数

教科書名	ELEMENT	CROWN	PRO-VISION	UNICORN
1課あたりの総語数（平均）	610	647	703	636
教科書名	PROMINENCE	WORLD TREK	Power On	BIG DIPPTER
1課あたりの総語数（平均）	668	400	327	436

母語習得だけでなく第2言語語習得にも大量のインプットが必要である。Lightbown & Spada (2013) は、“Classroom research has confirmed that students can

<sup>7</sup> 高校の教科書本文と比較し易いように、ダイアログ形式ではなくモノローグ形式で書かれた課の本文を対象とした。（ただし New Horizon の Unit 6 に限っては本文の中にダイアログも含まれる）

make a great deal of progress through exposure to comprehensible input without direct instruction”（「教室での研究では、直接的に言語を教えなくても、理解可能なインプットに触れることで生徒が大いに進歩することが多くの研究により示されています」白井他訳, 2014）と論じている。現在の日本の教育現場では、“教える”ことを前提にして教科書が選択される傾向にあり、“触れさせる”ための教科書、言い換えれば、教師の直接の関与をさほど必要としないレベルの教科書を選択するという発想はあまりないように思われる。もし、後者のような教科書を選択するのであれば、次にインプットの「質」が鍵となる。本研究で注目した高校教科書の難易度の問題は、「理解可能なインプットの仮説（the comprehensible input hypothesis）」（Krashen, 1985）に大きく関与する。学習者によってきちんと理解されないインプットは、いくら沢山与えても習得へはつながらない。十分な理解を伴わないインプットは、長期的な学習効果はおろか短期的な学習効果すらもたらさない。教科書の難易度が生徒の学習段階を反映したものではなく、学習にかなりの負担を強いるレベルである場合、当然のことながら、それらは、良質なインプット、あるいは理解可能なインプットとは言えないだろう。

さて、「コミュ英Ⅰ」の授業では、まずテキストをきちんと理解させた上で、その先の活動も積極的に行わせる必要がある。高等学校学習指導要領（2009）の第3章では「英語による言語活動を行うことを授業の中心とする」ことが明記されており、それを可能にするために、生徒には「生徒の理解の程度に応じた英語で書かれた文章」を読ませ、「概要や要点をとらえるような言語活動」を多く提供することが推奨されている（p. 50）。

「コミュ英Ⅰ」で無理なくコミュニケーションを行うことができる教科書レベルを考える場合、中学教科書のレベルを基準にするとよいのではないだろうか。高校に比べ、中学ではすでに多くの言語活動が行われているからである。つまり、中学3年用 Book 3 からどの程度難易度を上げたものであれば、中学と似たようなコミュニケーション活動が可能であるか、その点を考慮すべきである。無理して難易度の高い教科書を選定した結果、コミュニケーション活動を実施する以前に、内容理解にかなりの時間がかかってしまう、ということになれば、それは本末転倒である。中学教科書の難易度から大きく離れないレベルの教科書を選定することが、コミュニケーション活動を積極的に行うためには必須となるだろう。

## 7. まとめ

今回の教科書分析で明らかになったことは、以下の通りである。

RQ (1) 「コミュ英Ⅱ」と「英語Ⅱ」の教科書本文には、難易度に違いが見られるか？

→ Lexile Measure で 11L の差が出たものの、「コミュ英Ⅰ」と「英語Ⅰ」での 66L という差（大田, 2015）と比べると、違いがあると断定できる程の差とは言えない。考慮すべきは、新旧の教科書の差というより、そもそも 900L を超えるようなレベルの教科書が、積極的にコミュニケーション活動を行うのに適した教科書かどうかという点である。

RQ (2) 「コミュ英Ⅰ」と中学検定教科書の教科書本文では、難易度にどの程度の違いが見られるか？

→ Lexile Measure で「コミュ英Ⅰ」が 777L、中学用 Book 3 が 485 L であった。この 292L という差は、それ以外のどの学年間の Lexile Measure の差よりも大きいものであった。つまり、中 3 と高 1 の教科書の難易度には大きな開きがあること、そして、それが高校での学習をつまづかせる原因の一つになっている可能性があることが分かった。

「授業は英語で行う」という目標を目標で終わらせず確実に実施するために、また、訳読や文法解説に限定されないコミュニケーション活動を積極的に取り入れた授業を行うために、そして、何よりも、中学から高校への英語学習の橋渡しを円滑に進めるために、生徒にとって過度の学習負担がかからないレベルの教材を提供する必要があるだろう。

## 引用文献

- 浅羽亮一ほか. (2008). *WORLD TREK ENGLISH COURSE II*. 東京：桐原書店.
- 浅見道明代表. (2014). *Power On Communication English II*. 東京：東京書籍.
- 板垣信哉ほか. (2012). *SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3*. 東京：開隆堂出版.
- 市川泰男、高橋和久ほか. (2014). *UNICORN English Communication 2*. 東京：文英堂.
- 卯城祐司ほか. (2007). *ELEMENT English course II*. 大阪：新興出版社啓林館.
- 卯城祐司ほか. (2013). *ELEMENT English Communication II*. 大阪：新興出版社啓林館.
- 大田悦子. (2015). 「Lexile Measure で表す高校英語検定教科書の難易度－コミュニケーション英語Ⅰと英語Ⅰの比較－」. 『白山英米文学』第 40 号, 41-56.

- 笠島準一代表 . (2012). *NEW HORIZON English Course 1, 2, 3*. 東京：東京書籍 .
- 霜崎實ほか . (2011). *CROWN English Series II New Edition*. 東京：三省堂 .
- 霜崎實ほか . (2014). *CROWN English Communication II*. 東京：三省堂 .
- 神保尚武編著代表 . (2011). *Power On English II*. 東京：東京書籍 .
- 高橋貞雄ほか . (2013). *NEW CROWN ENGLISH SERIES 1, 2, 3*. 東京：三省堂 .
- 田中茂範ほか . (2014). *PRO-VISION English Communication II*. 東京：桐原書店 .
- 田辺正美代表 . (2014). *PROMINENCE Communication English II*. 東京：東京書籍 .
- 田辺正美代表 . (2008). *PROMINENCE English II*. 東京：東京書籍 .
- 東後勝昭ほか . (2012). *COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE 1, 2, 3*. 東京：光村図書出版 .
- 根岸雅史 . (2015). 「Lexile Measure による中高大の英語教科書のテキスト難易度の研究」『*ARCLE REVIEW* No. 9』6-16.
- 畠山利一ほか . (2014). *BIG DIPPER English Communication II*. 東京：数研出版 .
- 原口庄輔ほか . (2011). *PRO-VISION English course II New Edition*. 東京：ピアソン桐原 .
- ベネッセ教育総合研究所 . (2014). 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014 速報版」 . ([http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_05.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_05.pdf))
- 松本茂ほか . (2011). *ONE WORLD English Course 1, 2, 3*. 東京：教育出版 .
- 望月正道ほか . (2014). *WORLD TREK English Communication II*. 東京：桐原書店 .
- 森岡裕一ほか . (2011). *BIG DIPPER English Course II*. 東京：数研出版 .
- 文部科学省 (2010). 「文部科学省高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編」 ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_9.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf))
- 矢田裕士、吉田研作ほか . (2012) . *TOTAL ENGLISH NEW EDITION 1, 2, 3*. 東京：学校図書 .
- バツツイ・M・ライトバウン、ニーナ・スバダ (白井恭弘、岡田雅子訳) . (2014). 『言語はどのように学ばれるか 外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』 東京：岩波書店 .
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.
- Lightbown, P. M. & Spada, N. (2013). *How Languages Are Learned (4<sup>th</sup> edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- MetaMetrics. (2015). *The Lexile® Framework for Reading*. (<http://www.lexile.com/about-lexile/lexile-overview/>)